

古代蜀國史研究の新視点

——「蜀王本紀」と「華陽國志・蜀志」との読み比べを通じて——

徐 朝 龍

一 はじめに

「蜀王本紀」と「華陽國志」は古代四川地方（巴蜀）の歴史研究にとつて最も重要な文献である^①。とりわけ、新たな考古学発見が相次いでいる現在、考古学と文献史学の角度から巴蜀文化を探る上で、その文献価値がますます高く評価されるようになった。

「蜀王本紀」（「蜀本紀」とも、「蜀紀」ともいうが）は、いまから二千年あまり前の前漢時代に蜀（四川省西部）出身の大文学者として知られている揚雄が著したものとされているが、これを否定的に見る見解もある。しかし、文献そのものが漢代の作品であることはほぼ間違いないと広く考えられている。

一方、「華陽國志」は南北朝時代の成漢時期に同じく蜀地出身の常璩という人物によって著されたもので、その中の「蜀志」中

の漢代以前の部分は「蜀王本紀」に基づいたものと見られている。だが、両文献の蜀の古代部分に関する内容を付き合わせてみると、その間に記述上多くの相違が存在していることがわかる。これらの相違はどのような性格のものなのか、歴史的事実とどう関係するか、といった問題は、研究の上で文献内容の吟味と批判を行なう格好の研究材料になるはずである。

ところが、これまでの文献史学の世界では、「華陽國志」は著者が明確であり、書かれた当時に引用できる参考文献が比較的に多く、秦漢時代にとりわけ詳しいといったところから、高度な信頼が寄せられている。これは作者の常璩が権威的な研究者に「標準的四川史家」と称えられているところからもわかる。これに対して、「蜀王本紀」（「全漢文」輯録）は散乱した資料の集成によるもので、ポリュウムがあまりなく、前漢時代の宣帝までと時代

的にも限られる上に、著者と著作時代にさえも問題があるとされている。このため、その内容は断片的にしかり利用されなかったり、批判の対象になったり、あげくの果てには、一部の権威のある学者から「荒唐不經（荒唐無稽）」と一蹴されたりする始末なのである。^④

同じ巴蜀の歴史を研究する主要文献にもかかわらず、二つの文献はなぜこうも扱いが異なるのか、筆者はかねてから疑問を抱いてきた。よく考えてみれば、文献史学におけるこうした状況は四川地域における考古学研究の長期にわたる停滞に大きく関連しているように思われる。考古学による裏付けのない状況が続く中、比較的体裁の整った「華陽国志」から読み取られた巴蜀の古代歴史は、時間が経つにつれ、次第に固定観念めいたものになり、漢代以前の四川の歴史を記録する「蜀王本紀」は完全にその陰に追いやられ、しかるべき評価もされずに現在にいたつたのである。

ところが、近年になって、巴蜀文化に関する考古学は数々の大発見によって驚異的な進展がもたらされてきた。これらの発見は、従来の巴蜀歴史に関する常識を大きく塗り替え、全体の枠組そのものを揺さぶりはじめている。そして、当然の成り行きとして学界では従来文献中心の研究姿勢から文献史学と考古学をリンクして歴史の再検証を行なうことが要求され、新出土の実物資料は必

然的に文献内容に対して見直しと再評価を迫ることになった。こうした情勢において、「華陽国志」と、その陰に覆われがちな「蜀王本紀」に対し、その記載内容の異同を具体的に比較分析し、さらに考古学の進展を踏まえて、巴蜀歴史の真実にできる限り迫っていく作業を行なう時期が今こそきている、と筆者は考えている。

思い起こせば、この二つの文献の間に存在する記載の異同については、高名な歴史家である顧頡剛先生が四〇年代に「論巴蜀与中原的關係」という著書の中で、「扞格抵牾」（食違つて抵触しあう）の部分を二箇所ほどあげ、「華陽国志」の著者の常璩が中原文化の影響を深く受け、「蜀王本紀」の記載を改竄したとして批判を浴びせた。^⑤ 残念なことに、彼は結局単に批判することにとどまり、両文献のそうした相違が巴蜀の歴史を復元させる上でどのような意味をもつのかについては、踏み込んだ研究を示さなかった。だが、これは顧氏を責めるべきではない。というのは、彼自身は考古学の知識をあまり持たず、ましてや一九四〇年代には巴蜀文化に関してほとんどこれといった考古学の成果がなかったからである。

今日のように、われわれは、三星堆遺跡、成都西郊十二橋遺跡、指揮街遺跡、撫琴小区遺跡、羊子山遺跡、新繁水観音遺跡、彭県竹瓦街、昭化宝輪院、涪陵小田溪、忠県滄井溝など数多くの重要

な考古学発見を擁しており、情勢と研究条件は大きく変化した。

したがって、文献記載に裏付けを与える考古学資料を手中にしながら研究を深めることが可能になりつつあるいま、「蜀王本紀」と「華陽国志・蜀志」とをあらためて読み比べることによって、顧氏とは全く異なる成果を得ることができると考えられる。そして、これは単に文献批判と再評価を行う問題にとどまらず、初期の巴蜀歴史を見直し、より正確に把握することにもつながるからである。以上は筆者がこの小文を執筆する動機である。

① 「蜀王本紀」は清代跋可均による輯本が「全漢文」(巻五三)に収録されている。また、「漢唐地理書抄」や「太平御覽」などにも散見されている。一方、「華陽国志」は清代嘉慶十九年の廖寅による題襟館本を顧広圻が校刊するものが比較的有名だとされているが、最近では任乃強氏による「華陽国志校補函注」(上海古籍出版社、一九八七年)と、劉琳氏による「華陽国志校注」(巴蜀書社、一九八四年)があり、両方ともむしろ現在の研究では多用されている。

② 徐中舒氏(「論巴蜀文化」、四川人民出版社、一九八一年)は「蜀王本紀」が三國時代の蜀の譙周の手によるものとしている。蒙文通氏(「巴蜀古史論述」、四川人民出版社、一九八一年)は著者は揚雄ではないとしながらも、文献そのものは前漢時代宣帝以前の作品で、揚雄よりも前に書かれた可能性があると考えている。

③ 顧頡剛：「論巴蜀与中原的關係」、四川人民出版社、一九八一年、三頁。

④ 徐中舒：「論巴蜀文化」、四川人民出版社、一九八一年、一四一頁。

⑤ 上掲注③

二 「蜀王本紀」と「華陽国志・蜀志」 との読み比べ

「蜀王本紀」が「華陽国志」より先に書かれたという前提に立ち、前者の内容を軸に「華陽国志・蜀志」の内容をもってこれに付き合わせ、「扞格抵牾」の部分を検証してみる形で作業を進めてゆくことにした。こうして得られた結論を踏まえ、さらにこれまで進展してきた考古学研究成果に基づいて可能な限り歴史の真実に近づきたいと思う。

なお、検証作業で取り扱う範囲については、紙面の制限を考慮し、今回は、主に蜀地歴史の前期段階、即ち、神話伝承時代から鼂靈の開明王朝の登場までとしておきたい。というのは、開明王朝になると、両文献の記載がそれほど食い違わなくなり、また、それ以降が「巴蜀文化の時代」であるという認識が学界で定着し、その文化の性格も前の時代とは相当異なるからである。また、「蜀王本紀」がこれまで軽視されてきたのは、その原本がすでに遺失し、ほとんど後世の各種文献の引用から集成してできた部分しかなく、しかも記載に誤りが少なくないからである。したがって、読み比べ作業を通じて、それらの記載上の誤りについても指摘してゆくこととする。

以下、まず、蜀地歴史の前期段階を中心に、問題の箇所を一二にしぼり、項目に分けて比較検証を進めてゆきたい。

(1) 蚕叢から魚臯の時代

① 「蜀王」と「蜀侯」

「蜀王本紀」では、蜀地における最初の支配者である「蚕叢」は「先称王者」とされている。これに対して、「華陽国志・蜀志」の中では、常璩は「蚕叢」を最初に蜀地を支配した者として認めてはいるが、具体的な記述にあたって、明らかに自らの考えに基づいて細工を行った。つまり、彼は、中原地方における「諸侯——王——帝」という図式にしたがい、蚕叢をまず「蜀侯」に落とし、た上で、はじめて「始称王」としたのである。

そこで、「蜀王本紀」の中における「蜀王」はどのような性格のものなか、はたして中原地方のような「王」と同列として考えられてよいのかが、疑問となってくる。「蜀王本紀」の記載によれば、「蜀王」の当時の社会状況は「是時人萌、椎髻左衽、不晓文字、未有礼楽」と表現されている。どうやら、「蜀王本紀」の著者が記した最初の「蜀王」は、人間がはじめて未開から目覚め、文字もなければ、礼楽も成立しない蜀地の部族同盟をまとめた首領のようなものに過ぎなかったようである。それは中原地方における「諸侯——王——帝」という上層支配階級の構造が確立した

当時の社会状況とは異なり、より原始的な農業社会を想像させるようなものである。それは少なくとも常璩の理解したような文明社会に進んで久しい周代の王と同格のものでは決まれないと思われる。

では、考古学の角度からこの問題を考えてみよう。三星堆遺跡における土器の編年により、初期蜀文化は四つの時期に分けられることになった。第一期の新石器晚期文化がその後続く文化とはやや異なり、第二期から文化は大きな変容をみせ、そのまま第四期まで続いてきたとされている。しかし、第一期文化はそれ以降の文化とは決して断絶しておらず、むしろ第二期から第四期までの文化の土台をなしていた感がある。一方、第二期から「鳥頭勺」という鳥の頭を模した把手のつく勺子が流行し始め、第四期まで存在する。これに加え、三星堆遺跡の「祭祀坑」から出土した遺物に「蚕叢」の姿と見られる「縦目」「青銅仮面」と「魚臯」（水鳥）を表すと思われる巨大な鳥頭などの鳥造形が含まれるところから、第一期から第四期までの文化に「蚕叢」から「柏灌」「魚臯」までの民族的、文化的な一貫性が存在していると広く考えられている。したがって、学界では第一期文化を蜀の地における最初の農耕社会の支配者とされる「蚕叢」の時代に比定する意見が大勢を占め、第二期から第四期までの間を「鳥頭勺」など突出し

対 照 表

『蜀王本紀』	『華陽國志・蜀志』
<p>上古時、蜀之君長治國久長〔148頁注②を参照〕。</p> <p>蜀之先称王者、有蚕叢、柏濩（灌）、魚鳧、蒲澤（「文選」の「蜀都賦」注）、開明。</p> <p>蜀王之先名蚕叢、後代名柏濩（灌）、後者名魚鳧、</p> <p>此三代各數百歲、皆神化不死、其民亦頗隨王化去。魚鳧田於湍山得仙。今廟祀之於湍。</p> <p>是時人萌、椎髻左衽、不曉文字、未有礼樂。……時蜀民希少。</p> <p>從開明已上至蚕叢積三万四千歲。</p> <p>有一男子名曰杜宇、從天墜、止朱提。有一女子名利、從江源井中出、為杜宇妻。</p> <p>乃自立為蜀王、号曰望帝。</p> <p>治汶山下、邑曰郫。</p> <p>化民往々復出。</p> <p>望帝積百余歲。</p> <p>荆有一人名鼈靈、其屍亡去、荆人求之不得、鼈靈屍隨江水上至郫、遂活、与望帝相見。</p> <p>望帝拜鼈靈為相。</p> <p>時玉山出水、若堯之洪水、望帝不能治、使鼈靈決玉山、民得安处。</p> <p>鼈靈治水去後、望帝与其妻通、慙愧已德薄不如鼈靈、乃委國授之去、如堯之禪舜。鼈靈即位号開明帝、帝生廬保、亦号開明</p> <p>望帝去時、子鵲鳴、故蜀人悲子鵲鳴而思望帝。</p>	<p>蜀之為國、肇於人皇、与巴同囿。至黃帝、為其子昌意娶蜀山氏之女、生子高陽、是為帝嚳、封其支庶於蜀、世為侯伯、歷夏、商、周。</p> <p>周失綱紀、蜀先称王。有蜀侯蚕叢、其目縱、始称王。死作石棺槨、國人從之。故俗以石棺槨為縱目人冢也。</p> <p>次王曰柏灌、次王曰魚鳧。</p> <p>魚鳧田於湍山、忽得仙道。蜀人思之、為立祠</p> <p>後有王曰杜宇、教民務農、一号杜主。時朱提有梁氏女利遊江源、宇悅之、納以為妃。</p> <p>七國称王、杜宇称帝。更名為蒲卑。</p> <p>移治郫邑、或治瞿上。</p> <p>自以為功德高於諸王、乃以褒斜為前門、熊耳靈闕為後戶、玉壘峨眉為城郭、江、潛、綿、洛為池沢。以汶山為畜牧、南中為園苑。</p> <p>巴亦化其教而力農務。迄今巴蜀民農時先祀杜主時荆地有死者、名鼈冷、其屍亡至汶山、却是更生、見望帝、以為蜀相。</p> <p>会有水災、其相開明決玉壘山、以除水害</p> <p>帝遂委以政事、法堯舜禪授之義、遂禪位於開明。帝昇西山隱焉。</p> <p>時適二月子鵲鳥鳴、故蜀人悲子鵲鳥鳴也。</p>

た文化要素を象徴とした水鳥崇拜の「柏灌時代」と「魚鳧時代」とにそれぞれ相当させてよいと考えられている①。

この「蚕叢の時代」にあたると思われる第一期の一般的な文化内容を見ると、基本的に新石器時代以来の様相を呈し、放射性年代測定では時代も紀元前二千八百年頃から二千年頃までとあって、とても中原の周時代における物質文化と対等に論じられるようなものではない。むしろ、「蜀王本紀」のいうように、それは「不曉文字、未

有礼楽」という比較的原始的な農業社会を思わせる程度の内容である。従って、その時代の「王」といえども、その文化的なレベルからすれば、複数の集落共同体を統合する部族同盟の首領に過ぎなかったと考えて妥当なのかもしれない。

② 「蚕叢」から開明までの実年代数の問題

「蜀王本紀」（全漢文）では冒頭から「従開明已上至蚕叢積三万四千歳」とある。これは即ち、開明王朝（後述）の終焉からさかのぼって蚕叢に至るまで、三万四千年も経過していたということになる。ところが、こうした年代認識を示しながら、同著者は「蚕叢、柏灌、魚鳧」という蜀王たちの系譜について「此三代各数百歳」としているの、明らかに自己矛盾している。その年代によれば、仮にこの三代の「各数百歳」を前出の「三万四千歳」から引くとして、三代以降から開明王朝の終焉までまだ三万数千年が残ることになる。確かに「蜀王本紀」に「上古時、蜀之君長治国長久」という記載もあるとされている。^② それにしても、「三万四千年」は長すぎる。なお、唐時代の大詩人李白がその有名な詩「蜀道難」の中に「蚕叢及魚鳧、開国何茫然。尔来四万八千歳……」といったところに至っては、芸術的な誇張としか聞こえない。一方、「太平御覽」に引用される「蜀王本紀」の該当部分では「三万四千年」ではなく、「四千年」となっている。仮にこの年

数をとるとして、開明王朝が秦の司馬錯によって征服される紀元前三一六年（これで開明王朝が終わる）まで「凡王蜀十二世」と「三百五十年」を経過したとされるので、それに「各数百歳」をプラスしても「四千年」にはまだほど遠い。

どうやら「三万四千年」というのは「各数百歳」とはっきり書いた「蜀王本紀」の著者が自己矛盾したのではなく、後世の誤記だったのかもしれない。というのは、常璩が「華陽国志・蜀志」を書くにあたり、自分の見た「蜀王本紀」の記載を「周失綱紀……此則蚕叢自王、杜宇自帝、皆周之叔世、安得三千歳？」とその年代を疑問視したところからでもわかるように、「蜀王本紀」にもともと記載されたのはおそらく「三万四千歳」ではなく「三千歳」だったはずだからである。^④ そして、もしこの「三千歳」が元来の記録だったとすれば、後述のように、開明王朝の終焉とされる紀元前三一六年を起点にし、「蚕叢、柏灌、魚鳧」三代の「各数百年」を念頭に三星堆第一期の紀元前二千八百年前までさかのぼって加算してみると、「蜀王本紀」に本来記されたと思われる「三千年」という年数は一応大差なく整合性のあるものであることがわかる。

一方、最近の考古学の進展により、初期蜀文化の年代について比較的に根拠のある結論を出すことが可能になりつつある。三星

堆遺跡を例にしてみると、放射性炭素年代測定によれば、第一期

文化は四千八百年前に始まり、「魚鳧王朝」の終焉の第四期の終わりは、およそ二千九百年頃前となって西周時代中期頃に相当する。すると、開明王朝の終焉となる紀元前三一六年から逆算すれば、四千八百年前、即ち紀元前二千八百年頃までは、約二千五百年ほどあることになる。確かに、「蚕叢」が「蜀王」となって一代「数百年」を経験していたとされている。しかし、「蜀王本紀」には王になる前に「蚕叢始居岷山石室」とあるところから、その部族が川西平原に定住するまで岷山山中で活動した時代は短くても数百年はあると見てよいと思われる。よって、この数百年を上記の二千五百年に足すと、ほぼ三千年という数字になるわけである。

こうして考えれば、「蜀王本紀」の言う「三千歳」は概数だが、決してそうかけ離れた数字ではなさそうである。あるいは、これは偶然的要素がある数字かもしれない。しかし、少なくとも、常璩の言う「蚕叢自王」、つまり自ら王となった「周失綱紀（周平王が東の洛陽に都を移した紀元前七七〇年と一般に考えられている）」という時点には、蚕叢から魚鳧までの蜀王朝がすでに減んで数百年経ったはずであるから、彼の記載は年代的に成り立たない。このことから見ても、「蜀王本紀」にもともとあったと見られる「三千歳」という認識は常璩の主張する年代よりははるかに合理的な

ものと言えよう。

③ 「蚕叢、柏灌、魚鳧」は三人の王か、それとも三つの時代か

「蜀王本紀」によると、著者は「蚕叢、柏灌、魚鳧」のことを三人の王ではなく、「此三代」、つまり、三つの「時代」か、あるいは「王」という以上、夏王朝、殷王朝を記述する「史記」の体裁を意識して本の題名を「本紀」にしたように、性格的に「三代」を「王朝(Dynasty)」と考えていたようである。だからこそ、彼には「各数百歳」という認識があったのかもしれない。ところが、「華陽国志・蜀志」では、常璩は「蚕叢、柏灌、魚鳧」を三人の王として記録している。これはどうやら彼自身の年代認識に基づいた結果らしい。「周失綱紀、……有蜀侯蚕叢……始称王」という「華陽国志・蜀志」の記載に見るように、常璩にとって、蚕叢が蜀の地で王と称したのは周が天下を支配する力を失った時点、即ち、周平王が洛陽に都を移した紀元前七七〇年以降だったということになるわけである。そして、魚鳧以降に杜宇は「七国称王」(周頭王在位の紀元前三六八年から三三〇年までの間とされる)の際、帝と称したとしていたため、常璩の「諸侯—王—帝」という図式でいけば、杜宇の蜀王として在位した期間が帝になる前に長くあってしかるべきである。しかし、「七国称王」の周頭王時

代から「周失綱紀」の周平王時代にさかのぼってみても、間が四百年あまりしかない。その間に、「蚕叢、柏灌、魚鳧」に加えて「杜宇」の帝になる前の時代をも入れることになる、当然「蜀王本紀」に記されるような三代で「各数百年」というわけにはいかなくなる。このことを常璩も充分に意識していたのか、「三代」のところを改め、三人の「蜀王」にしたのかもしれない。

考古学の上からみると、三星堆文化が川西平原を中心の一つの文化系統として西周時代の前半まで（紀元前九世紀頃）二千年以上持続的に存在していたことがわかる。この文化は巨大な城壁都市、発達した青銅産業、階級を表わす玉器、王権と富を象徴する金製品などをもち、成熟した宗教システムを誇り、中原地方の夏殷、西周（前期）と時代的に並行して四川地域で圧倒的な存在になっていた^⑤。これほど長期の発展を経た文化だから、「蚕叢」、「柏灌」、「魚鳧」という三人の王がこのような長きにわたって蜀国の社会に君臨していたとは物理的にも考えられない。したがって、やはり「蜀王本紀」のいうように、三部族の交代による「三代」が、つまり、「Three Dynasties」がそれぞれ「数百年」を経験し、あわせて二千年以上の時間をカバーしていたと理解した方がより合理的であろう。ともかく、考古学の事実は三人の王だけが蜀で治世していたとする常璩の認識を否定しているのである。

④ 「縦目」と「石棺槨」

「蜀王本紀」では蜀の地を支配した最初の王である「蚕叢」の人相についてはなにも記されていない。これに対して、「華陽國志・蜀志」には「（蚕叢）其目縦」というように具体的な描写まである。目が縦になるという記載について、その姿を具体的にイメージすることはなかなかできないため、これまででは学者たちをずいぶん悩ましてきた。このため、常璩の記載を「荒唐無稽なもの」と断罪する人は少なくなかった。ところが、最近の三星堆における考古学の重要発見の中に巨大な目玉が飛び出た青銅仮面などが実物として含まれ、「目が縦なり」という記述とは常識的にみて偶然の一致ではありえないものとして関係者を驚かせた。つまり、これは「華陽國志・蜀志」における「その目が縦なり」という記載が正しいことを見事に裏付けたのである。したがって、「蜀王本紀」に漏れたこの重要な史実を常璩が「華陽國志・蜀志」に収録したことは高い評価を受けるようになった。

一方、蚕叢時代の蜀地における風習についても、「蜀王本紀」と「華陽國志・蜀志」の両文献は大きな食違いを見せている。その代表的な例は「石棺槨」の問題である。「蜀王本紀」（「蜀都賦」を注釈する章樵が引用する部分）に「蚕叢始居岷山石室中」とあり、蚕叢の部族が石と深いかわりをもっていたことを窺わせる。

しかし、その埋葬風習については「蜀王本紀」はなにも触れていない。これに対して、「華陽國志・蜀志」によると、「(蚕叢) 死、作石棺、石槨、国人従之。故俗以石棺槨為縱目人家」というように記されている。だが、現実問題として、四川地域における石棺埋葬(主に北西から南西部の山岳地帯に分布する)はほとんど三星堆文化より後のもので、古くても春秋時代を遡らないし、蜀国の中心地である平原部にいたっては巨石遺跡(石棺槨ではない)があるものの、該当する時代における埋葬はほとんど土葬であった。したがって、三星堆文化の中に石棺槨が存在しない事実からして、「石棺槨為縱目人家」という記述は、当時おそらく平原周辺(山岳地帯で聞き込み調査をして得た)「縦目家」という伝承をそのまま鵜呑みした常璩の勇み足だったのかもしれない。

(2) 杜宇の登場と交代

① 杜宇の出身地とその魚鳧との関係

常璩が「華陽國志・蜀志」の中で「蜀王本紀」の内容に対して行なった最大の改竄は杜宇の身分である。「蜀王本紀」では杜宇のことについて「後有一男子、名曰杜宇、從天墜、止朱提……乃自立為蜀王」と記されている。そこにある「一男子」、「從天墜」、「止朱提」、「自立為蜀王」などから見ても明らかのように、杜宇はそもそも蜀の人間ではなく、魚鳧王朝とはつながりをもたなか

った。しかも、他所からきた彼は、魚鳧から蜀王を正統的に継承するのではなく、自ら勝手に蜀王に立ったのである。三国時代にあって、来徴による「本蜀論」(『水経注』所引)は「望帝者、杜宇也、從天下。女子朱利、自江源井中出、為宇妻」とし、「蜀王本紀」の記載を基本的に踏襲している。ところが、常璩は杜宇と魚鳧とのこうした関係についてよく理解できなかったためか、両者があたかも順当な継承関係にあったかのように、「蜀王本紀」の記載にさまざまな細工をして書き換えを行なったのである。

彼は、まず杜宇が外来者であるという事実を抹消するために、「蜀王本紀」の記載から「從天墜」を削除した。しかし、「朱提」という地名についてはおそらく削りにくい事情でもあったのか、常璩はそれを杜宇からその妻になる「利」という女性に移植し、「時朱提有梁氏女利」とした。ところが、「蜀王本紀」の記載をみると、「利」という人物は「從江源井中出」といわれ、即ち、蜀地の江源(今四川西平原北西部の崇慶、灌県あたりの古地名)の出身になっているのである。そして、その蜀地の「利」は「為宇妻」、つまり、外来者の杜宇の妻になったと「蜀王本紀」にあるが、ここでも常璩は手を加えて「宇悅之、納以為妃」と書き換えて、つまり、杜宇が朱提出身の「利」を気に入って妃として蜀地へ迎え入れたかのように見せかけようとした。常璩に言わせると、

杜宇は外来者ではなく蜀地主着の王であり、その妻は朱提からたまたま蜀地の「江源」へ遊びにきて杜宇に妻として納められたに過ぎないということになる。こうした書き換えによって、杜宇とその妻との出身地は全く逆転してしまったのである。

よく考えてみると、常璩がこのように改竄を行なう基本的な動機は蜀地の王系が断絶なく一脈のように順序よくつながっていたことを強調したかったのかもしれない。そして、彼のこうした動機はほかにも窺える。たとえば、彼は「蜀王本紀」にある「一男子」や「自立為蜀王」などの記述を自らの主張に抵触するためにことごとく削除し、「後有王曰杜宇」で置き換え、杜宇が魚鳧王を受け継いで当たり前のように王になったのであって、自ら勝手に蜀王の位についたわけではないということを強く示唆しようとした。そして、杜宇が代々受け継いで蜀地を支配していた複数の王の中の一人に過ぎないという印象を強めるために、常璩はさらに「(杜宇) 自以為功德高於諸王」という表現をわざわざ使い、諸王たちと杜宇との関係を意識させようとした。このような書き換えを経て「蜀王本紀」の記述は根本的に変わり、杜宇が蜀地で生まれ育ち、魚鳧に次いでなんの問題もなく順当に蜀王の王位を継承したかのような記述となったのである。

この最も肝心な部分について両者を比較すると、改竄の跡ばかりが目立つ常璩のストーリーより、やはり「蜀王本紀」の記載が

自然で真実味を帯びることが容易にわかる。おそらく、杜宇の真の身分は一人の人間ではなく、一集団、あるいは一文化グループを意味する名前だったのかもしれない。彼(ら)はどこの「天」から朱提に降りたのか、今のところまだ不明だが、蜀地出身の人間ではないことは確かである。そして、蜀地で足元を固めるために、したたかな外来者の彼(ら)は江源にある「利」という蜀地の社会集団と婚姻関係を結んだようである。そのことを足がかりにしていたためか、彼らは蜀地で勢力を急速に伸ばし、ついに魚鳧王朝からの政権奪取に成功した。そこで新しい支配者らしく杜宇は自ら蜀の王と称するようになったのである。こうした政権交代劇の存在を強く示唆する文言はほかにはのちにとりあげられる「(魚鳧) 得仙」と「化民」などがある。実際に、外来の集団によって蜀地の政権が乗っ取られることはこれ以後もあり、杜宇と籠霊との間の交代劇がしかりである。

② 魚鳧の終焉について

魚鳧王朝の終焉について、「蜀王本紀」では「(王たちは) 皆神化不死」とした上、杜宇登場を控える魚鳧の行方を「田於湔山得仙」と記されている。ところが常璩は、なぜか「忽得仙道」というように具体的に表現を改め、事件に時間的緊迫感をもたせたの

である。これはどうやら彼の蜀国に対する年代認識によるものであるように思われる。というのは、常璩は「周失綱紀」から「七国称帝」までという四百年ほどの間に、杜宇のほかには蚕叢、柏灌、魚鳧を入れなければならないことを意識したのか、魚鳧が仙道を得たことを「突如」のできごとにするこゝによって、各王の占める時代にバランスがとれるように文言上の調整をしようとしたのかかもしれない。

さて、魚鳧が仙人になったということはいったい何を意味するのか、杜宇との関係に関する記載も曖昧になっている中、理解はこれまで難しいとされてきた。が、近年の考古学の進展はこの謎を解くことを可能にした。たとえば、三星堆遺跡で発見された例の破壊され、焼いて捨てられた青銅、玉、金、象牙などの「財宝」、および同時期に放棄された巨大な城壁都市などが明らかにその主の運命を暗示するものである。その主とは魚鳧王朝であることはすでに明確になっているため、王朝が非業な最期をとげたことは遺物の様子を見れば一目瞭然である。^⑥

魚鳧が「得仙」とか、「得仙道」などといわれることは、杜宇王朝が登場する前にその王朝が減じたことを暗示する表現だったと考えられる（このことを有力に傍証するのが「得仙」の後に続く「其民亦随王化去」と「化民往復出」といった文言である、

後述）。一方、破壊され焼かれた遺物に見られるように、王朝の崩壊は暴力によってもたらされた可能性が高い。では、誰が魚鳧王朝を滅ぼしたのか、というのが問題になってくるが、それは常識的に見ても、「蜀王本紀」に記されるように、魚鳧王朝に代わって「從天降」の外來者であり、遠慮もせず自ら蜀王になった杜宇とその一族をおいてはかに考えられないであろう。

その杜宇王朝の文化については、考古学上、崩壊した蜀地の政治中心の三星堆に代わって、南の成都西部を中心とし、古卑江およびその支流に沿う形で、現在の西門から新南門までの数キロにおよぶ広大な地域が、尖底器を特徴とする土器群をもつ新文化圏を形成したことが確認されている。殷周時代、とりわけ西周時代に属する遺跡が多く分布するこの地域は、蜀地の政治的地殻変動の結果であり、新しい支配者の杜宇という名前によって代表される社会共同体の基盤であったと見られている。^⑦ 言い換えれば、これは新しく蜀王になった杜宇は、蜀地を支配する中心を北の三星堆からより広大な南の成都平原へと移動したということを示しているのである。このことについては、以下の項目でまた議論するでしょう。

③ 「化民」の問題

「蜀王本紀」には、魚鳧が湔山で仙を得た後、「其民亦随王化

去」とあり、そして、杜宇が天下を手中にして蜀が安定すると、魚鳧王とともに去った「化民たち」は「徃復出」という記述が残っている。これらの記述は「化去」と「化民」といった表現で魚鳧と杜宇との関係を明確にしているのである。「化」とは魚鳧王朝に従属し、その政治制度、文化伝統に組み込まれていた意味である。「化民」はいわば、魚鳧王朝支配下の民衆のことである。「其民亦随王化去」とは、化民たちは魚鳧が「仙人」になって蜀地の政治舞台から去るのに伴って王を追随していったというように理解されてよからう。

一方、「化民徃復出」とは、杜宇は「化民」たちにとって征服者で新支配者だが、都を「郫」に定めたその政権が安定し、天下の大勢がほぼ決まったのを見て、旧政権に追随して逃亡した蜀民たちは「復出」、即ち隠れ場所から自分たちの家に再び戻ってきたと解釈されてしかるべきである。したがって、明らかに魚鳧王と杜宇王とは政権の性格が基本的に異なり、支配していた主体民衆も同じではなかった。「蜀王本紀」の著者は必ずしもこの点を明確に意識していたわけではないのかもしれないが、「化民」と「復出」という二つのキーワードを無造作に書き残したため、そのほかの関係記述とあわせて魚鳧王朝と杜宇王朝とを分けて前後にして蜀地を支配する別々の政権として認識するのに有力な証

拠をわれわれに与えたのである。

④ 杜宇の都をめぐる

「蜀王本紀」によれば、杜宇は蜀王になって「治汶山下、邑曰郫」、即ち、汶山の麓に「郫」という都市を構え、蜀地支配の政治的中心にしたという。この郫とは上に述べた成都西部にあたると見られている。そのあたりにはいまでも「郫」という地名が残っている^⑧。そして、その後の記述を見れば、杜宇は自ら国を鼈靈に禪譲するまで都をほかのところへ移動したことがないことがわかる。

これに対して、「華陽国志・蜀志」の記述は大きく異なっている。まず、そこには「(杜宇) 移治卑邑」とあり、つまりこの件は、杜宇が郫邑を都にする前に別のところを政治的中心にして支配を行っていたように思わせているのである。ただし、その旧都はどこにあったのか、明らかではない。常璩にしてみれば、魚鳧王を継承した杜宇が前の都から新しい都に移ったということは王のやることとして自然のことであり、むしろ旧都と新都との存在をもって両者のつながりを暗示することができるという効果があるのかもしれない。

ところが、「移治郫邑」に続いて、「華陽国志・蜀志」には「或治瞿上」という記述もあり、杜宇が同時に二つの都をもっていた

ことを窺わせるのである。「蜀王本紀」に登場しないこの「瞿上」は「郫邑」に遷都する以前の都だったかどうか、「華陽國志・蜀志」の記述の文脈からは読み取ることができない。おそらく常璩自身も「瞿上」についてよくわからなかったようである。しかし、常識的に考えれば、「郫邑」がどこから移転してきて作られた都であり、杜宇がそこからまたどこかへ遷都したことがないということから、「瞿上」は「郫邑」より以前の蜀地の都だった可能性が高いと考えられよう。この問題に関しては、われわれは「瞿上」をおそらく無意識に収録して残した常璩に感謝しなければならぬ。というのは、彼のこの記載は蜀文化の謎を解くのに重要な価値をもつものだからである。即ち、結論から言えば、この「瞿上」とはほかでもなく魚鳧王朝の都の三星堆を指すものである（この問題については、筆者はすでに他に論述があり、それを参照されたい）。^⑨ともかく、蜀地の政治的中心が変わったという意味において、常璩が記録した「(杜宇) 移治郫邑」という一句ははからずも歴史の事実をとどめてくれたといえよう。

⑤ 「蒲卑」の問題

「蜀王本紀」(「全漢文」輯録)には歴代蜀王を列挙した際、「蚕叢、柏灌、魚鳧、開明」という順になり、なぜか「杜宇」の位置はそこにはみあたらない。しかし、「文選」に収録される「蜀都

賦」の注記に引用された「蜀王本紀」の記載には「魚鳧」に続いて「蒲澤」という名前が見られる(ただし、同じ「文選」の「思元賦」の注記では「澤」でなく「淖」となっている)。一方、「華陽國志・蜀志」を見ると、杜宇に関する記述の中に「更名蒲卑」というくだりがある。こうなると、蚕叢から開明までの諸蜀王の順序は両文献が一致することになった。

しかし、「蜀王本紀」では冒頭にだけ「蒲卑」が登場し、後の杜宇に関する記述の中には全く触れられていないので、「蒲卑」はどういう経緯からの名前なのかわからない。「華陽國志・蜀志」はこの欠陥を補い、「蒲卑」とは杜宇が自らの名前を改めた結果であることを明らかにしている。「蒲卑」という二字のうち、「卑」とは杜宇の都を指すと見られているが、「蒲」とは「鳧」のこととされている。^⑩どうやら杜宇も「蒲」こと「鳧」を自らの王国のシンボルにしたのかもしれない。というのは、「蚕叢(蚕)」「柏灌(水鳥)」「魚鳧(水鳥)」「および」「開明(獸、虎)」などはいずれも王朝一代のトーマの性格をもつ名前だと考えられているからである。杜宇は天下をとってからなぜわざわざ自分の名前を「蒲卑」に改めたのか? これはおそらく当時の政治的な必要性に迫られた選択だったのかもしれない。つまり、筆者の推測では、杜宇王朝は魚鳧王朝から蜀の天下を奪取したのち、政権の安定をはかり、

蜀地の人心を掌握するために、自分も魚鳧王朝と同じように、水鳥をトーテムとして信奉するようなポーズを政治的な目的から取らざるを得なかった可能性が高い、ということである。

⑥ 杜宇の治世年代

「華陽國志・蜀志」では杜宇が蜀地を支配した年代が明らかにされていない。しかし、「蜀王本紀」には「望帝積百余歳」という記述があり、一応一つの重要な手掛かりになっている。ところが、この「百余歳」は秦による巴蜀征服の年（紀元前三一六年）以前のどのあたりに相当するか、議論が集中するところである。これまで学界では秦による征服の年、即ち開明王朝の滅亡の年でもある紀元前三一六年から杜宇王朝の年代を逆推して算出する方法が一般的である。これはつまり、「華陽國志」にある「開明氏凡王蜀十二世」という記述を踏まえ、「路史余論」に記される「三百五十年」を参考に計算してみると、紀元前三一六年から遡り、杜宇に代わって開明王朝が蜀を統治しはじめた年はおよそ紀元前六六六年頃、ほぼ春秋時代前期にあたるという結果を得ることができたのである。この年代に杜宇の支配年数という「百余歳」（たとえば、百五十年以内とする場合）を加算すれば、杜宇が蜀王になり、「望帝」と号した年は紀元前九世紀の後半に入ることになる。即ち、杜宇王朝は少なくとも西周時代後期に本格的に蜀を支配し

ていたということが考えられるわけである。いうまでもなく、政權奪取までの時間を考慮に入れれば、その登場の実年代はさらに西周中期、あるいは、前期に遡ることもありうる。この問題は文献史学の限界を越えており、のちに考古学の結果に基づいて検証されるべきものである。

考古学の上では、杜宇王朝の存続年代を確定する裏付け条件が今のところ三つほどある。

(1) まず、魚鳧王朝が崩壊する時点を杜宇王朝の成立と見なすことができる。三星堆遺跡が放棄され、大量の「財宝」が焼き捨てられたのは、西周前期後半から中期までの間と見られているため、その年代をもって杜宇王朝のスタートとすることに無理はない。

(2) いうまでもなく、兩王朝の間に交代するまで力の消長という並存期間があったと十分考えられる。成都西部の十二橋遺跡や羊子山祭壇などの存在に見られるように、三星堆文化と並行して殷後期頃から、一つの新しい文化実体がすでにそこに存在していた。そして、三星堆文化崩壊以降、そこを中心とした成都地域は蜀地の政治的中心に変わった。その新しい文化の担い手は時代関係から見ても、文献の分析によっても、杜宇王朝以外はありえない。

(3) 杜宇王朝の終焉は文献では大洪水に対する無策によって別の勢力に取って代わられたとされている（後述）が、「大洪水」は王

朝崩壊の直接の原因なのである。考古学の現場でも、その洪水が実際に起きていたことが確認されている。たとえば、三星堆遺跡の第八層の上、指揮街遺跡第六層の上、方池街遺跡第五層の上などにいずれも厚い洪水泥層が溜まっており、その上に春秋時代前期の遺物が重なっていることがよく知られている。そして春秋前期に属する遺物は濃厚な楚文化の要素を帯びる「巴蜀文化」のもととされ、その特徴は非常に鮮明である。従って、それ以前の春秋初期頃をもって杜宇王朝の下限としてほぼ間違いない。これは文献記録をもとに算出された紀元前六六六年という春秋前期の年代ともあまり抵触しない結果なのである。

⑦ 杜宇が王から帝へ

常璩が「七国称王」を「杜宇称帝」と対応させたのは、その前に「後有王」という段階がすでにあったため、王から帝という中原地方の図式に従い、「蜀王本紀」の「号曰望帝」というところを敷衍したからであらう。確かに、中原地方では戦国時代に斉と秦がそれぞれ東西の帝と称した史実がある。しかし、蜀地の歴史を書くにあたり、中原の歴史展開を過剰に意識し、それに当てはめようとすれば、必ず矛盾が生じることになる。

上にも明らかにされたように、「七国称王」は紀元前四世紀中頃のことであり、杜宇王朝の期間は西周中頃から春秋初期までの

間である。そして、杜宇王朝以降、紀元前三一六年まで一二世も続いた開明王朝について文献では比較的明確な記述が残っている。それらの史実に基づいてみれば、杜宇王朝が「七国称王」の時代まで続いていた可能性は年代的に全く考えられない。したがって、常璩が「(杜宇)号望帝」を強引に「七国称王」と並行させたことは、当時蜀地がすでに開明王朝の支配下にあって久しいという事実まで無視した、常識的な誤りといわざるをえない。「蜀王本紀」によれば、自ら蜀王になった杜宇は中原の王たちについて意識した様子もなく「望帝」を号したという。いうまでもなく、「帝」といっても、蜀地の「望帝」をもって中原地方の「帝」とイコールさせる必要はあったかどうか、はなはだ疑問である。劉琳氏が「華陽国志校注」の中に「蜀人語言与華夏族異、所謂「帝」「王」皆中夏訳語、非其本称」と指摘するが、蜀の王と帝は蜀ならではのものではなかったはずである。

⑧ 杜宇と鼈靈との政權交代の原因

「華陽国志・蜀志」の杜宇に関する記載を読むと、著者の常璩が杜宇を英雄扱いにしていることがよくわかる。杜宇が鼈靈に政權を委譲する背景をめぐる描写がこのことを端的に表わしている。「蜀王本紀」によれば、杜宇はたとえ王であってもあくまで平凡な一人の人間として描かれている。朱提から蜀地へ来て嫁をもら

い、自ら蜀王にのぼりつめたが、神がかった万能な王ではなく、治水ができないようなこともあれば、他人の妻と姦通するような凡人の行爲もあった。したがって、最後に自分は「徳薄」、即ち、君主としての道徳が足りないかと恥じて政権を鼈靈に譲ったのである。著者はこうして無造作な記録でもって杜宇を生身の人間として生き生きと伝えている。

ところが、常璩は蜀王になる人間として上述のような欠点をもつことが許されないと考えたようである。そのため、彼は杜宇に関する私生活上のスキャンダルや、治水能力の欠如など都合の悪い記載を悉く削除した。そして、杜宇は鼈靈を治水に起用し、功績をあげさせたため、国の政治を任せることにし、最後に政権までも禪譲した、というように常璩は巧みに演出し、「明君義主」の姿を描きだそうと懸念であった。彼はさらに「巴蜀民農時、先祀杜主君」という風習を現地で見ても連想を飛躍させ、「（杜宇）教民務農」として巴蜀の地における農業の始まりをも杜宇の功績にした。さらに、杜宇の偉大な功績を称えるために、常璩は四川盆地の範圍に基づいて杜宇王国の全盛期の領域を「以褒斜為前門、熊耳、靈闕為後戸、玉壘、峨眉為城郭、江、潜、綿、洛為池沢。汶山為畜牧、南中為園苑」と想像を膨らませてたくましく描きだした。思えば、巴蜀研究の大先学である故蒙文通教授がかつて常

璩の歴史を書くスタンスを「序蜀郡先賢、是以品徳為次第」と評しているが、杜宇についての描写を見ると、それがよくわかる。

① 実際は、杜宇が鼈靈に交代されたのはおそらく彼は大洪水に對する無策で民心を失ったからかもしれない。そこで、治水に成功を治めた外来者の鼈靈は功績が評価され、当然の新支配者として蜀地に君臨するようになったと理解されるべきである。上でも明らかにしたように、開明王朝が杜宇王朝にとって代わるのは春秋時代前期であり、これは洪水層から得た年代とも符合する。従って、文獻に記録された大洪水が蜀地における王朝交代のきっかけを作ったと十分に考えられよう。即ち、杜宇は自ら進んで政権を外來の部族に明け渡すのではなく、蜀地に入り、治水成功で政治的地位を急速に高めた荊楚の鼈靈は「侵逐皇帝」という強硬な行動に出て、ついに杜宇から蜀地の政権を乗っ取り、開明王朝を開いたのである。

① 発掘された文化層の中に認められるこの「鳥頭勺把」の登場と最後までの存続は「柏灌」や「魚鳧」が「水鳥」だという古來からの認識を裏付け、第二期―第四期の文化を「柏灌時代」と「魚鳧時代」とに当てるのに説得力のある根拠を与えた。一方、それらをもとに、その前にある第一期文化はほぼ「蚕叢時代」のもとの順当に推定され、第三期以降に登場した青銅器、金器などに「蚕叢」の姿を表すと見られる巨大な「縦目」仮面が重要な存在として含まれる事実は「蚕叢」、「柏灌」、「魚鳧」という「三代」の文化的連続性を示すものとされて

いる。

② 「古文苑」に収録される揚雄の「蜀都賦」の中の「密促之君」に對し、章樞が注釈として「蜀紀」から「上古時、蜀之君長治國久長」という一句を引用している。

③ 「開明氏凡王蜀十二世」は「華陽國志・蜀志」によるが、「三百五十年」は「路史余論」にある。

④ 「華陽國志序」に「有為蜀伝者、言蜀王（開明王を指す）、蚕叢之間周回三千歳」とあり、「蜀伝」とは「蜀王本紀」のことを指すと見られている。

⑤ 上掲注①。徐朝龍、NHK取材版：「謎の古代王国：三星堆遺跡は何を物語るか」、NHK出版、一九九三年、東京。

⑥ 四川省文物管理委員会、他：「広漢三星堆遺址一号祭祀坑発掘簡報」、「文物」第一〇期、一九八七年、一〇一四頁。

四川省文物管理委員会、他：「広漢三星堆址一号祭祀坑発掘簡報」、「文物」第五期、一九八九年、一〇一九頁。

徐朝龍：「三星堆遺跡における二つの遺物埋納土穴の性格をめぐって」、「茨城大学教養部紀要」第二五号、一九九三年、四九〇六五頁。

⑦ 趙殿増「三星堆考古發現与巴蜀古史研究」、「四川文物」三星堆古蜀文化研究專輯、一九九二年：八〇九頁。

⑧ 「蜀王本紀」によれば、「(杜宇) 治汶山下、邑曰郫、……匱靈屍隨江水上至郫」となっているが、「後漢書、張衡伝」の唐代章懷太子による注釈によれば、「揚雄「蜀王本紀」曰：荆人匱令死、其屍流亡、隨江水上至成都」とある。ここから「郫」と「成都」とは近い関係にあったと窺える。さらに「新修郫県志」によれば、「杜鵑城、在縣北郊、揚雄「蜀紀」：杜宇代魚鳧王蜀、徙都於郫」とある。

⑨ 徐朝龍：「瞿上再考：三星堆為魚鳧都//瞿上說」、「三星堆与巴蜀文化」、巴蜀書社、一九九三年、二七五～二八一頁。

⑩ 「礼記、明堂位」に「周以蒲勺」という句を鄭玄が「蒲、合蒲、如鳧頭也」と注釈している。また、黄侃の「爾雅音訓」によると、「鳧之名亦因於蒲、鳧蒲之語皆自敷来」とある。つまり、「蒲」とは鳧のことなのである。

⑪ 宋治民氏（「広漢三星堆一号、二号祭祀坑幾個問題的探討」、「南方民族考古」第三輯、六九〇八四頁、四川科學技術出版、一九九一年）は三星堆遺跡の二つの「祭祀坑」の年代を西周後期に置いてそれを杜宇王朝の終焉と見ている。緻密な研究を経た氏の年代決定には基本的に賛同するが、担い手の認定には反対である。一方、三星堆城壁都市が放棄されたのは西周前期だと陳徳安氏が考えている（「三星堆遺址」、「四川文物」第一期、一九九一年）が、三星堆文化最終期の第四期も年代が西周前期に比定されている。西周前期といっても、前半と後半があるので、宋治民氏の年代を参考に考えれば、おそらく西周前期後半から中期までの間のある時点が、都市の放棄、文化の終結、王朝「財宝」の破壊と埋納など一連の関係事件が起きた時間だったと推測できよう。

⑫ 劉琳：「華陽國志校注」、巴蜀書社、一九八四年、一八三頁。

⑬ 蒙文通：「巴蜀古史論述」、四川人民出版社、一九八一年、九四頁。

⑭ 「說郛（百二十卷本）六十に「太平環宇記」から「皇帝自逃之後、欲復位不得、死化為杜鵑」という一節が引用されており、杜宇王朝と開明王朝との交代は平和的なものではなかったことを匂わせている。

三 結 び

以上の比較を通じて、巴蜀文化を研究する上で重要な両文献に從來見えなかったもう一つの側面が見えてきたといえよう。これ

まで「荒唐無稽」と批判されてきた「蜀王本紀」の記載内容は今日の考古学の研究成果とは驚くほど一致する部分があることがわかった。これに対して、巴蜀文化を研究する最高経典とされてきた「華陽国志・蜀志」は却って改竄の跡が目立ち、矛盾に満ちていることが判明した。

今から言えば、これは漢代から魏晋までという歴史の流れの中でむしろ当然の成り行きと言うべきところである。というのは、「蜀王本紀」は「本紀」という名のように、著者が蜀を中原王朝の一部ではなく、あくまで文化的にも政治的にも一つの独立の地域として扱おうとしたものである。漢代当時においては、中国は政治的には統一されたものの、文化、歴史についての認識は必ずしも「一元化」の方向にまとまり切れなかったと思われる。そのため、「蜀王本紀」の著者は地方史を記述するにあたって、中原地方の歴史がほとんど視野になく、飾り気をせず忠実に蜀地の歴史を反映しようと筆を運ぶことができたのである。今は断片的な部分を集めたものであるにもかかわらず、その記録を見てもわかるように、内容は自然体で、全体として自らの枠組みをなしており、他の地域の歴史展開に左右されるものではないといえる。

ところが、「華陽国志・蜀志」が書かれる時代になると、漢代から数百年の文化的、思想的な再編を経て中原文化中心という歴

史認識が社会に深く浸透しているという背景のもとで、常璩もこうした認識に影響されずにはいらなかった。これは彼の歴史をり書く基本姿勢に現われ、「華陽国志」を貫くものになった。つまり彼は執筆にあたって終始中原文化の歴史展開を念頭に据え、「人皇」、「黄帝」、「昌意」など、冒頭から蜀の歴史の流れを中原歴史のそれに従わせ、それと連動した一部としてとらえようとするわけである。そうしたスタンスから、常璩は、数世紀前に書かれた「蜀王本紀」の内容に対して取捨選択を恣意的に行ない、改竄、加筆、創作を加えて蜀地の前期歴史を大きく変貌させた。彼のこうした行為は千年以上にわたって人々の歴史認識に多くの矛盾と混乱をもたらし、歴史の真相を多くとどめる「蜀王本紀」に不当な扱いを受けるきっかけを作らした。

言えば、つい最近まで権威のある研究者が「常璩既克八家之書、取材又頗謹慎、応為現存最可靠之纂輯文字」と常璩を高く評価している^①が、上の比較検証の結果をみてもわかるように、このような評価は少なくとも蜀地前期段階の歴史に関する限り、事実に対するものである。むしろ、筆者は「華陽国志」にある常璩のこうした改竄行為をもってその中の秦漢時代から晋代までの記載までも一緒に否定するつもりは毛頭ない。それどころか、蜀地の前期段階の歴史についても、たとえば常璩が「華陽国志・蜀志」に収

録した「(益蔭) 縦目」や「(杜宇) 移治卑邑」および「瞿上」など非常に貴重な部分は、本人はその意義を認識できないうちにせよ、今日の考古学の研究結果とうまく照合できるのであり、高く評価されなければならない。しかし、それでも歴史の客観性と一体性を重視するという立場からすれば、中原中心の歴史観に基づき、蜀の初期歴史を意のままに書き換えるという常璣の手法は厳しく批判されるべきである。

ともかく、以上の結果を踏まえ、今後の研究、とりわけ蜀地の前期段階の歴史についての研究においては、われわれは「蜀王本

紀」の記述を積極的に利用し、「華陽國志・蜀志」の記載とあわせて作業を進めるというように文献利用の手法を改める必要がおおいにあると考える。これは蜀地前期段階の歴史に関して「蜀王本紀」の史料価値は「華陽國志・蜀志」のそれより高いということ、歴史の謎を解明する鍵を握る考古学の進展が雄弁に証明しつつあるからである。

① 任乃強：「華陽國志校補図注」の前言。

(国際日本文化研究センター助教授